

教育楽器を用いた「合奏劇」の教材性に関する研究 — 幼小連携の観点から —

望月たけ美, 山本 華子*

A study on teaching aids for “Ensemble-Plays” using educational instruments
: from the point of view of cooperation between preschools and
elementary schools

MOCHIZUKI Takemi, YAMAMOTO Hanako

2020年11月6日受理

抄 録

本研究では、先行研究「学生・子ども・保育者それぞれに働きかける「合奏劇」の教材としての有効性」(2019)での考察をもとに、幼児が初めて音や楽器に出会う環境作りに着目した「合奏劇」の実践を振り返り、幼児の豊かな感性と表現を育む音楽体験をねらいとした鑑賞教材としての有効性を整理し、確認した。また、保育者アンケートから、幼児が初めて楽器に触れる際の意識と工夫点について考察した。更に、「合奏劇」の3つの定義「登場人物が楽器である」「楽器との初めての出会いにおける環境作り」「聴く・見る・触れる・感じる・考える音楽体験」を踏まえた時、幼児の楽器遊びから小学校入学後の器楽や鑑賞、音楽づくりでの学びに繋がる教材とし「合奏劇」が有する可能性が示唆された。

キーワード：合奏劇、リズム楽器、音楽体験、幼小連携、教材

1. はじめに

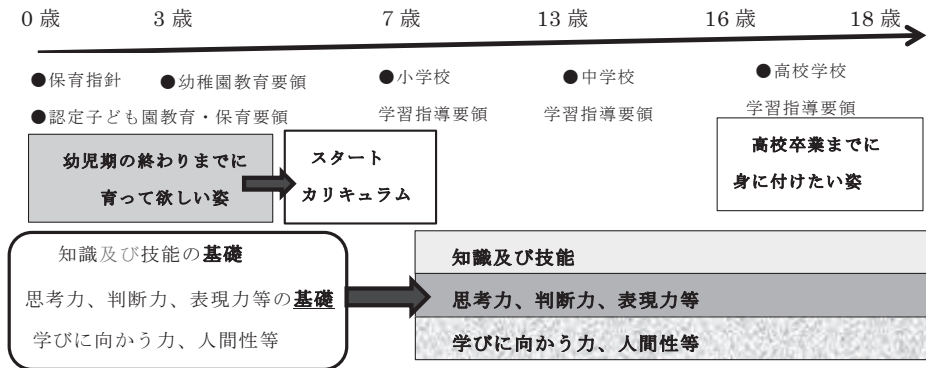
1.1 研究の背景

平成29年に改訂された幼稚園教育要領（平成30年4月より施行）を皮切りに、小学校及び中学校学習指導要領が同年に告示され、小学校学習指導要領においては令和2年4月1日から施行、中学校学習指導要領においては移行措置を経て令和3年からの全面実施となっている。続く高等学校学習指導要領改訂では、令和4年度から年次

* 小田原短期大学保育学科専任講師

進行での実施となっているが、平成31年度からすでに一部を先行しての実施が開始された。幼小中高15年程に渡る、幼児から児童・生徒に至るまでの成長の過程と教育目標を一貫して示し、相互または相互を超えた教員同士が各課程での実践や蓄積を見通しやすくし、確かな学力の育成を図ることが考え方の基本にある。また各教育課程を過ごしていく幼児から児童・生徒に対し、何のために学び、何が出来るようになるのかを明確にし、これからの社会を生きる力となる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善への推進が示された。この深い学びに繋がる資質・能力として示された3つの柱に「知識及び技能の習得」、「思考力、判断力、表現力等の育成」、「学びに向かう力、人間性等の涵養」があり、未来を生きる子どもたちに資質と能力を身に付ける要となり得るこの3つの柱を重視している。

「図1」 幼稚園教育の先続く深い学びに繋がる3つの柱



(作図：望月)

この深い学びの土台に位置するのが幼稚園教育である。幼稚園教育では、この3つの柱を「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」とし、柱の2本には「基礎」という言葉を添えている。学びの芽生えの部分を担当する幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえて環境の中で教育が行われ、この環境を設定し計画するのは幼稚園教育に関わる全ての保育者である。小学校以降の教育の主たる教科書に代わるものとして、幼児期では日々の生活や遊びの中で関わる身近なものや人、事象との出会いや体験が教材となり、日々の生活を送る環境こそが教材そのものであると言える。どのようなねらいを持って、どのような環境を提供出来るのか、保育者自身の資質と能力が問われるのが保育の現場である。教材となるより良い環境を提供出来る保育者の養成に当たり、碓井(2017)は、教材が幼児にとって継続する遊びとなった時に、最も幼児に適した教材になりうるとし、環境構成や援助の方法を探ることの重要性を指摘している¹。

それでは、幼児の音楽表現を伸ばさせていくためには、どのような教材性を持った環境が必要であろうか。幼稚園教育要領総則第1章の第2の幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では、就学前までに育

てたい幼児の姿として10項目が挙げられているが、その項目内にある「豊かな感性と表現」では、次のように示されている。

①心動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、②様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、③感じたことや考えたことを自分で表現したり、④友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

枠内の下線①は「知識及び技能の基礎」、下線②③は「思考力・判断力・表現力等の基礎」、下線④は「学びに向う力、人間性等」の3つの柱との関連性を見出すことが出来ると考える。この資質・能力を育むことを担う保育者は、幼児期の特性を踏まえた上で、よく聴く、よく見る、よく触れる、よく感じる、よく考える音楽体験が出来る教材の工夫に努め、「やってみたい」「出来るようになりたい」という幼児の主体的な活動を引き出し、就学後の音楽教科での主体的な学びの姿を見据えた視点を持っていたい。

1.2 問題の所在

平成元年に幼稚園教育要領が教育内容のポイントを5領域として示して以来、「表現」領域においても、幼児の音楽表現を育むことや、保育者養成に向けた数多くの教材が考案されてきた。幼児の楽器遊びにおいても、楽器の奏法や演奏指導に関する分野に特化した教材や、既成曲による幼児向けの合奏曲も多く編曲されている。しかしながら、1つの楽器を大人で演奏するようになっていたり、楽器の音色には特にこだわらずに複数楽器が組み合わされて同時に演奏するように編曲されていたりと、各楽器の特性を意識せず、単に合奏体験をねらいとした教材も散見する。実際に演奏してみると、楽曲の曲調とはかけ離れた合奏や音色になり、実践した学生からも疑問の声が上がることもあった。時代は平成から令和に移り、平成元年からの三十年の月日の中で、保育者や幼児を取り巻く音楽環境は速度を上げて変化し、環境の中に様々な電子音が溢れ、誰もが個々に音楽を瞬時に選択して、手元・耳元の操作で簡単に音楽を楽しめるようになった。このような時代において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にある「豊かな感性と表現」が目指す幼児の姿や、幼児がよく聴く、よく見る、よく触れる、よく感じる、よく考える音楽体験とは、どのような教材による環境構成によって求められるのだろうか。幼稚園教育で楽器遊びを通じた体験が、小学校音楽科での教育楽器を用いた学びにどのような連携をもたらすのかを踏まえ、幼児期の教材選択とその発展性について検討していく必要があると考える。

1.3 研究の目的と方法

研究の背景を踏まえ、筆者らは、〇短期大学保育学科で保育者養成に従事するに当たり、保育学科学学生や保育者の音楽的表現能力の向上、音楽的環境を構成できる保育者の養成、また幼児の豊かな感性と表現を引き出す音楽体験をねらいとした環境構成に繋がる教材の作成を模索していた。筆者らは、2019年において、幼児が初めて音

や教育楽器に出会う環境に着目して「合奏劇」を教材化し、その実践をもとに「合奏劇」の教材性について研究を進めてきた。

本研究では、次の4点について考察する。

1. 「合奏劇」の教材性その1として、鑑賞教材としての視点での教材性について考察する。
2. 「合奏劇」の取り組みと実践を振り返り、「合奏劇」の各現場での有効性について考察する。
3. 実践後に実施した保育者アンケートの結果から、幼児が初めて触れる音や教育楽器に触れる体験が保育現場でどのような環境の中で行われているのか調査する。
4. 「合奏劇」の教材性その2として、小学校第1学年の音楽の教科書に掲載されているリズム楽器に関する教材を調べ、幼小連携における音楽体験に関わる教材としての活用とその展開性及び可能性について推察する。

1.4 「合奏劇」の定義

本研究における「合奏劇」では、「登場人物は楽器である」、「楽器との初めての出会いにおける環境作り」及び「聴く・見る・触れる・感じる・考える音楽体験」の3つを兼ね備えた劇であると定義する。

1.4-1 「登場人物が楽器である」の定義

「合奏劇」とは、セリフを中心に音楽が挿入されて進む一般的な劇の様式とは違い、登場人物は教育楽器自体であり、各楽器は個々の特性やキャラクター性を打ち出した歌を用いて楽器になりきって演じることに特化した劇である。役者には、楽器自体となって演じることで、楽器の素材や形状、奏法によって変わる音色の種類、歌に乗せて楽器の魅力をいかに伝えられるかが求められる。更に、楽器になりきる上でのセリフの言い方や身体表現における工夫、歌の音楽的要素を理解した表現力が必要になる。白石（2018）は、保育者養成校において簡易打楽器を子どもの歌と共に演奏する経験が、子どもたちの表現活動の幅を広げる大事な環境作りであるとしている²。

「合奏劇」では、登場人物が、自身の楽器を紹介する子どもの歌と共に演奏し、楽器になりきって表現する場面を各楽器ごとに必ず設ける。演じ手は、幼児、児童、学生、保育者、教員など活動の用途によって設定できる。

1.4-2 「楽器との初めての出会いにおける環境作り」の定義

幼稚園教育では、様々な体験を通して「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向う力、人間性等」を総合的に育てていく。保育者は、音楽的活動や音楽体験を通して、幼児が何を学び、幼児の感性と表現力をいかに育て育むのか、豊かな遊びや活動を環境設定する中、初めての出会いにおいて幼児が心動かされる体験に着眼した。初めて聴く音や奏法による音色の違いを幼児が耳を傾けて聴くことが出来る場面を作る、初めて見る楽器の形状や素材の見せ方を工夫するなど、

初めて触れる楽器との出会いの方法に関する環境作りに徹底してこたわる。

1.4-3 「聴く・見る・触れる・感じる・考える音楽体験」の定義

幼稚園教育要領第2章のねらい及び内容では、幼児が生活する環境作りの領域として、心身の健康に関する「健康」、人との関わりに関する「人間関係」、身近な環境との関わりに関する「環境」、言葉の獲得に関する「言葉」、感性と表現に関する「表現」の5つを挙げ、各領域と総合的に関わりながら展開する環境の中で幼児が体験を積み重ねていくことこそ幼稚園教育であると示している。この環境作りの中でも、感性と表現に関する領域「表現」は、身体を使って感じることを、感じたことを表出させることは生涯を通じて欠かすことの出来ない人間の姿であり、「人間関係」や「言葉」の領域とは特に関わりが深い。この「表現」の領域性を活かした聴くこと、見ること、触れること、感じること、考えることに繋がる総合音楽体験教材として、筆者らは「合奏劇」を教材化した。また、「合奏劇」を鑑賞した後では、幼児が登場人物となった楽器と触れあう「楽器体験コーナー」を必ず設置し、幼児が、劇の登場人物であった全ての楽器と実際に触れ合うことが出来るようにする。つまり、劇鑑賞後の「楽器体験コーナー」での楽器体験を含めて「合奏劇」と定義する。

(望月たけ美)

2. 「合奏劇」の教材性その1：鑑賞教材としての視点

「合奏劇」の題材の原作は、『幼児の音楽と表現』に掲載されていたお話「がんばれカスタくん」³であるが、この原作をもとに台本を作成し、作成した台本を用いることで様々な現場に対応し、実践できる教材とした。次に、「合奏劇」を鑑賞教材の視点で捉えた時の教材の特徴であるの5つのポイントを挙げる。

2.1-1 「合奏劇」の教材性：実践時の環境設定の容易さ

合奏劇「がんばれ！カスタネットくん」の上演時間はおよそ20分である。登場人物は少ないが、担当人数を用途に応じて設定出来る。登場人物である楽器は、タンブリン、トライアングル、鈴、カスタネットのリズム楽器4種と、雨だれ役のハンドベルである。ハンドベルは、C1,D1,E1,G1,A1,C2の5音を用いて合奏するため最少でも3名は必要となる。他に、ナレーターとピアノ伴奏が劇の進行役を担う。登場人物においては、実践の用途や人数に応じて楽器を増やすことが可能で、これまでの実践では、スティック（小太鼓等の撥）も登場人物に加えた。リズム楽器4種の楽器の数は各1つから可能であり、実践者の人数に応じてリズム楽器担当者の数をいかようにも調整出来る。

また、実践時の環境に応じて、舞台作りが容易である。「表1」に示すように、保育者養成校、保育現場、保育者研修等で2019年に実際に行ったが、下見の出来ない場所での実践においてもその場に合わせた舞台作りが容易であった。

加えて、「合奏劇」鑑賞後の「楽器体験コーナー」は、登場楽器数に応じた机を用意し、

そこに楽器を並べて簡単に設営することが可能である。

「表1」「合奏劇」の実践状況 2019年版

	保育者養成校での実践	保育現場での実践	保育者研修での実践
実践の対象	「音楽表現ⅠB」受講学生	「表現実践」「ゼミナール」受講学生	K県新採用幼稚園教諭
実践人数	45人×3クラス	最少6名、最多12名	16名×2グループ
楽器の配役	クラス45名で実施のため、各楽器を複数で担当	各楽器1～3名 カスタネット役のみ1名	各楽器3名 スティックを加えた研修版 ピアノ伴奏は研修講師(望月)が担当
実践場所	音楽リトミック室	園内の多目的ホールまたは保育室	T大学音楽室
鑑賞者	授業受講者135名 授業実施教員(筆者ら)2名	A保育園0～5歳児80名 B保育園2歳児10名 C幼稚園3歳児43名 D保育園3～5歳児60名 各園の保育者	研修参加者32名
練習に要した時間	90分×3回	90分×4回 昼休み30分×5	約50分
準備したものの	各楽器、譜面台	各楽器、譜面台、各リズム楽器ごと着用の4色4種のバンダナ、雨の小人用の手作り衣装、ナレーター用蝶ネクタイ	台本、楽譜、楽器、譜面台、ピアノは全て会場のものを使用
実践当日の環境設定への対応と準備	音楽リトミック室を上演舞台と見立て、立ち位置、出入り、振り付けの確認	初めて訪問した園の上演舞台構成、教室やホールの使い方、園児の鑑賞位置決め等の環境の即時設定 上演後の「楽器体験コーナー」設営用テーブル5つ、体験用楽器の準備。 全て暗譜での実施	初めて使用する音楽室での上演方法決め
鑑賞者側の惨禍場面	特になし	終曲の全体合奏での歌による飛び入り参加	終曲は参加者全員で歌いながら合奏

2.1-2「合奏劇」の教材性：鑑賞対象の幅広さ

「表1」に示すように、これまで保育者養成校での授業実践として、保育現場での鑑賞として、保育者研修での研修プログラムとして「合奏劇」を実践してきたが、鑑

賞対象はいずれも、学生、0歳から5歳までの幼児、新採用幼稚園教諭である。学生においては、授業内でのグループごとの相互評価としての鑑賞、幼児においては「合奏劇」の鑑賞、新採用幼稚園教諭においては研修時に初めて出会った保育者の演奏表現を学ぶための鑑賞として、「合奏劇」が幅広い対象への教材性を持っていると言える。

2.1-3「合奏劇」の教材性：領域「人間関係」とストーリー

「合奏劇」のお話の舞台は、ある幼稚園の休日の保育室である。登場人物であるタンブリン、トライアングル、鈴の順で形状や素材などを自己紹介し、奏法を駆使して楽器の音色自慢を行う。カスターネットが登場すると、「小さくてつまらない楽器」だと言って、みんな教室を去ってしまう。しょんぼりしたカスターネットのもとに、ハンドベル＝雨の小人が現れ、カスターネットを励まし、カスターネットの音色や奏法の魅力を教える。嬉しそうにカスターネットが演奏しているところに、先程去った楽器たちが戻ってきて、「さっきはごめんね」と謝り、その音色を口々に褒める。楽器たちは、どの楽器にも特性があり、みんな大切であることに気付く。最後は、全員で合奏を楽しむ。

領域「人間関係」では、その内容(7)では「友達よさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」、(10)では「友達との関わりを深め、思いやりを持つ」と示されている。「合奏劇」の主人公であるカスターネットは、その小さな形状から仲間に入れてもらえない寂しさを味わうが、雨の小人によって自分の良さに気付き、カスターネットの音色の良さに他の楽器も気づいていく。劇中全員で言う「どの音もみんな大切なんだよね」というセリフは、領域「人間関係」のねらいである人と関わる力を養うことにも繋がると考える。

2.1-4「合奏劇」の教材性：音色を聴く力を育てる

「合奏劇」の劇中には、各楽器の自己紹介時に、音色を聴かせる場面がある。幼児にとってカスターネット、トライアングル、鈴、カスターネット、ハンドベルはすでに馴染みのある打楽器ではあるが、素材や高低による音色の違い、強弱や奏法などの表現による音色の違い、速度による音色の変化、音の余韻、音の有無、他の楽器との違いにじっくりと耳を傾ける機会はなかなかないであろう。楽器役となって実践する側にとっても楽器の特性を知り尽くして表現する力が求められるし、鑑賞する側にとっても聴こえてくる音に耳を澄ます状況が起り得る。実践側と鑑賞側双方の聴く力を育むことが出来ると言える。

2.1-5「合奏劇」の教材性：奏法への興味関心を引き出す挿入歌

「合奏劇」の登場人物には、それぞれ自分自身を紹介して存分に音色を聴かせた後に歌いながら演奏する楽器の挿入歌がある。各挿入歌《タンブリンのわ》⁴、《トライアングルのうた》⁵、《すずらの鈴》⁶、《パクパクカスターネット》⁷、《雨だればたん》⁸は、各楽器の特性を捉えた曲調で、楽器の奏法による魅力を伝えるのに欠か

せない楽曲である。「表2」に示すように、歌詞の中に奏法と関わりのある言葉の仕様が見られ、奏法においては各楽器の特性を伝えるための主要奏法が全て挿入されている。挿入歌に乗せて歌いながら演奏することで、各楽器の奏法への関心を引き出すことが出来ると言える。

「表2」挿入歌の特徴

曲名（楽器）	調性	拍子	奏法との関わりのある歌詞	曲中で登場する楽器の奏法
タンブリンのわ （タンブリン）	C:	4/4	「素敵なこの音、聴いててね」 「素敵なこの音、配ってね」	・こぶし打ち、手のひら打ち、指打ち ・トレモロ奏
トライアングルのうた （トライアングル）	F:	3/4	「チーン・・・鳴りますよ」 「チリリリン・・・おもしろい」	・オープン奏法 ・トレモロ奏
すずらんの鈴 （鈴）	C:	4/4	「すずらんのすず」 「歌うよ歌う」	・手首打ち ・ジングル奏 ・トレモロ奏
パクパクカスタネット （カスタネット）	C:	4/4	「かわいい音がする」 「やさしい音がする」	・指先打ち ・トレモロ奏
雨だれぽったん （ハンドベル）	C:	2/4	「雨だれポッタンポッタンタン」	・サステイン奏法 ・トレモロ奏法

2.2 「合奏劇」の教材性その1の考察

「合奏劇」の鑑賞教材として捉えた特徴として、(1)実践時の環境設定の容易さ、(2)鑑賞対象の幅広さ、(3)領域「人間関係」とストーリー、(4)音色を聴く力を育てる、(5)奏法への興味関心を引き出す挿入歌の5つのポイントを挙げた。前述のように、幼児における日々の教材は身近なものや人、事象であると考えが、「合奏劇」を実践するに当たっては特別な環境を用意する必要はない。手の込んだ大道具や小道具も必要なく、音楽室も多目的ホールも保育室も研修会場も簡単に舞台に見立てることが出来る。実施場所でなく実施者が作り出す環境が重要であり、各楽器になり切った登場人物が鑑賞対象に対して楽器の魅力や奏法による音色の違いを、どのようにして伝えるかがこの劇が持つ教材性である。また、仲間外れにされて寂しい思いをしているカスタネットに対し自分の音色の良さに気付かせる雨の小人の役割や、どの音もみんな大切であると言った全員でのセリフなど、「音」の仲間で繋がった登場人物ならではの関わりから生まれる、自分とは違う音色を持った相手の良さを知り、その音色に耳を傾けることを自然に促すことが出来る教材でもあると考える。

（望月たけ美）

3. 「合奏劇」の実践の振り返り

「合奏劇」による取り組みの出発点は授業内での実践からであるが、授業内での実践に留まらず保育現場での実践、幼稚園教諭新採用教員研修の実践教材としても用いた。その教材としての有効性について筆者ら(2019)は、日本学校音楽教育実践学会(第24回全国大会)にて口頭発表を行った⁹。これまでの「合奏劇」実践の取り組みについて次にまとめる。

3-1. 「合奏劇」の授業での実践

〇短期大学保育学科の2017年度「音楽表現1B」(受講者145名)、2019年度「表現実践」(受講者12名)の授業で、幼児が体験する簡単なリズム楽器であるカスタネット、鈴、トライアングル、タンブリンの知識の習得として、「合奏劇 がんばれカスタネットくん!」を実践することを各グループの課題とした。実践における課題テーマとして、初めて幼児に楽器を見せる時、楽器の素材、形状、特性、音色、奏法が伝わる紹介の仕方を考えることとした。「音楽表現1B」では、上演後にグループ同士で相互評価を行い、「表現実践」では、学外実践時に録画した映像をもとに振り返りを実施した。

3-2. 「合奏劇」の保育現場での実践

〇短期大学保育学科のゼミナールや〇短期大学乳幼児研究所の2019年の学外活動において、K県内の3つの保育園と1つの幼稚園で、ゼミナール学生と「表現実践」受講者有志学生が実践の機会を得た。

2月8日にA保育園0～5歳児80名、2月14日にB保育園2歳児10名、7月17日にC幼稚園3歳児43名、12月18日にD保育園3～5歳児60名を対象として、各園を訪問して上演した。上演に当たっては、園のホールを使用しての実践、教室を使用しての実践など異なる舞台環境での上演となったが、各環境や異なる対象園児に対し臨機応変な対応が求められた。「楽器体験コーナー」は劇中で各楽器を担当した学生が担当し、上演後に速やかにホールや教室内に机を置き、布を敷いた上に楽器を並べ、幼児が気になる楽器を自由に選び楽器体験が出来るコーナーを設営した。

実践学生の事後アンケートからの考察では、幼児に「見せる」、「伝える」ことを意識出来るようになったこと、幼児の様々な反応に気付くことが出来るようになったことが窺えた。また、各実践時に録画した映像を実践学生に観てもらい、振り返りと討議の時間を設けたことで各学生が自身の課題を見出すことが出来たことから、保育者の資質・能力を育むことに繋がる教材として有効であることが分かった。また、参観した保育者へのアンケートから、登場人物のキャラクター性を通して、幼児が友達との関わり方を学べると感じ、更に各楽器への興味を持たせることが出来る教材であり、現場の保育者自身が「合奏劇」を活動の中で取り入れたいと考えたことが考察できた。

また、保育園Dの保育者のアンケートでは、劇のお話について、カスタネットくんが仲間外れにされる場面で、「カスタネットくんかわいそう」「優しくして」といっ

た声上がり、幼児がお話の内容を理解していることが記述されていたことから、台本としても理解しやすいものであり、領域「人間関係」のねらいである人と関わる力を養うことに繋がる内容を持っていると考察出来た。

3-3. 「合奏劇」の新採用教員研修での実践

2019年度K県私立幼稚園教諭新採用研修会の研修プログラムとして、研修用バージョンによる「合奏劇」を31名の新採用教員が実践した¹⁰。3時間の研修のうち、1時間半の指定時間の中で、各幼稚園から参加した互いに面識のない教員同士がグループを組み、初めて幼児に楽器を見せる時、楽器の素材、形状、特性、音色、奏法が伝わる紹介の仕方を課題テーマとして実践発表を行った。研修事後の教員アンケートでは、他の教員の表現方法を参考にしながら、制限時間の中で「合奏劇」を作り上げていく体験により、研修教材としての有効性を感じていることが分かった。

(望月たけ美)

4. 保育者アンケートの結果

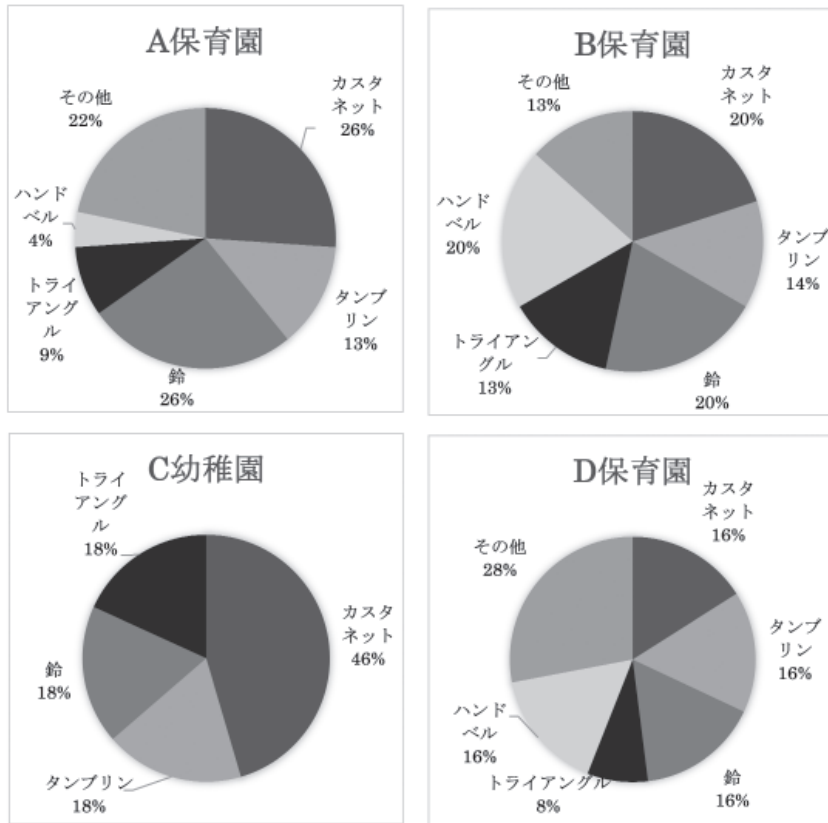
「合奏劇」の実践後に、劇を参観していた保育者に、(1)日頃の活動の中で使用されている楽器、(2)幼児が初めて楽器に触れる(出会う)ことについて意識したり工夫したりしていることの2点についてアンケートを実施した。

4.1 日頃の活動の中で使用されている楽器

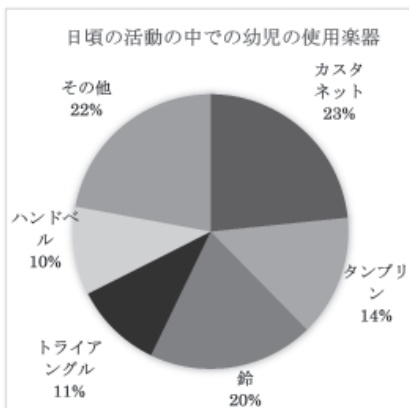
2019年度、O短期大学保育学科の2年生は、ゼミナールや授業「表現実践」、乳幼児研究所(未病応援団)の活動で、幼児の前で合奏劇を演じた。実践の場はK県の3つの保育園と1つの幼稚園であったが、その保育者たちに普段の保育活動についてアンケート調査を行った。

アンケート回答者は4つの園合わせて36名の保育者であったが、そのうち24名が日頃の活動の中で幼児が楽器を使っていると答えた。幼児が使用している楽器の種類は、「図2」「図3」の通りである。カスタネットが最も多く、次にその他、鈴、タンブリンの順であった。その他の楽器としては、手作りマラカス、鍵盤ハーモニカ、小太鼓、ウッドブロックの順であった(表3)。

「図2」 ABCD各園における日頃の活動の中で使用されている楽器



「図3」 ABCD園の結果のまとめ



「表3」 その他で使用されていた楽器

楽器名	回答(人)
手作りマラカス	5
鍵盤ハーモニカ	4
小太鼓	2
ウッドブロック	2
太鼓	1
鉄琴	1
大太鼓	1
木琴	1
ピアノカ	1
ハーモニカ	1
ピアノ	1
玩具のマラカス	1
マラカス	1

アンケート調査から、日頃、保育現場で子どもたちが楽器を使用していると答えた保育者が3分の2を占め、その内容はカスタネット、鈴、タンバリンなどの簡易打楽器が多いことが分かった。また、保育者の担当クラスから読み取れたのは、手作りマラカスを使用しているのは0～2歳児で、難易度の高い鍵盤ハーモニカを使っているのは5歳児であるということである。

4.2 子どもたちが初めて楽器に触れる（出会う）ことについて意識したり工夫したりしていること

まず、初めて子どもたちが楽器に触れる年齢を保育者たちに尋ねたところ、「表4」の回答を得た。0歳児という回答が14名であり、全回答34名中、14名と約40%を占めている。次に1歳児と3歳児の7名が続くが、2歳児の2名から3歳児の7名に増えるのは幼稚園教諭が回答者に含まれているからである。つまり、保育園では子どもたちが初めて楽器に触れる年齢として0～1歳児が多く、幼稚園では3歳児からとなっている。このデータから、保育者たちは子どもの発達の良い時期から楽器に触れさせようとしていることが分かる。

「表4」 初めて子どもたちが楽器に触れる年齢

担当クラス	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	その他
回答者数	14名	7名	2名	7名	0名	0名	4名

また、初めて子どもたちが楽器に触れることについて、意識や工夫をしているかという問いについては、24名が「している」、11名が「していない」と回答した。半分以上の保育者が意識・工夫をしていた。具体的にどのように意識・工夫しているか、保育者たちの記述内容を「表5」にまとめた。

「表5」 初めて子どもたちが楽器に触れることに対する意識と工夫点

分類	意識・工夫点	回答者
手作り楽器	今使用しているマラカスは手作りです。ヤクルトの空き容器に小豆を入れて子ども達と作り、大切に使用しています。	A1
	廃品を利用したりして手作り楽器を与えています。	A2
	楽器だけに限らず、0歳児さんでも音の出る玩具には興味を持って触ったり鳴らしたりしています。ペットボトルなどにビーズを入れ、簡単なマラカスのような玩具など使って使用しています。	D3
手作り楽器提示の仕方	本格的な楽器に触れる前段階として、似たような手作りおもちゃに触れる機会を設けたり、楽器の出てくる絵本などを読み聞かせたりしていた。	A9
手作り楽器楽しさ	0歳児など乳児クラスでは手作り楽器を用い、音が出る楽しさや驚きを楽しめるようにしている。	A11

楽しさ	楽器に触れることが楽しいと思えるように、楽しめる工夫をしています。	C4
	初めて触れるので、楽しく行えるような活動を意識している。	D2
楽しさ 扱い方	自分を表現をするひとつのものとして、楽しく取り入れられるように、その中に物を大事に使うということも伝えている。	A3
	楽しく丁寧に扱うように、言葉を掛けている。	A10
	触れる事の楽しさや大事に使うことの大切さ。	B2
扱い方	玩具ではあるが、大切に扱うことを伝えるようにしている。そのためにも、まずは大人が丁寧に扱うようにしている。	D7
魅力	子ども達が自分で触れてみたいと思う形の物や、保育士が楽しく歌ったり鳴らしたりしてアピールしてみたり、ピアノを出して、触れたり、リズムカルな曲を歌って聞かせてみたりしています。	D6
提示の仕方	歌の雰囲気に合わせて効果音的に楽器を選んで保育者自らが楽しんで演奏したり、歌ったりして興味、関心を持たせるようにしている。	A6
	カスタネットや鈴を子どもたちがよく知っている曲（チューリップなど）に合わせて音を出してみる。	B6
導入	楽器に興味をもてる様、最初の導入を工夫している。	D1
	子どもが興味を持てるよう、導入の時点でその楽器に対するエピソードを話したり、実際に音を鳴らしている。	D13
奏法・音色	その楽器をゆっくり見せたり、いろんな音を出してみている。	C1
	音色や使い方。	C6
	音色を感じたり、鳴らし方を学べるよう意識している。	D4
触れる	音を鳴らすだけでなく、触れたり音の変化を楽しんだり、できるようにしている。	D9
	音だけでなく、触れた感触などから楽しめるようにしている。	D10

「表5」においては、初めて触れる楽器として、「手作り楽器」が多かった。本格的な楽器を持たせる前に、0歳児から廃品などを利用した手作り楽器を玩具のように体験させるといふものである。子どもは早い時期から音が出るものへの興味を持つので、適切な音具を提供している。

そして、工夫点としては、何よりも楽しさや魅力を伝えるという点が意識されていた。あわせて、保育者自身が楽器を丁寧に扱い、楽器の扱い方を教えていた。保育者の工夫点としては、楽器や楽曲の選び方を考え、提示や導入の仕方を工夫したり、奏法や音色、触れることを意識し、子どもたちが初めて楽器に触れる体験を行っていることが分かった。

(山本華子)

5. 「合奏劇」の教材性その2：幼児の楽器遊びから小学校低学年「器楽」へ

前述の保育現場での楽器との関わりに関するアンケート結果が示すように、保育園では、手作り楽器やリズム楽器とのふれあいが0歳児から始められ、保育者が楽器への興味を引き出す工夫をし、ゆっくりと時間をかけ、楽しさや魅力を伝えることを意識していた。

「合奏劇」の保育現場での実践では、劇を鑑賞した幼児が劇の登場人物であった楽器と直に触れる「楽器ふれあいコーナー」を設けた。各現場では、劇を鑑賞した幼児の多くが登場した全ての楽器コーナーに向う姿が見られ、楽器を手に取り、担当学生に楽器の持ち方を聞いていたり、劇中で見せた奏法を真似てみたりしていた。保育者アンケートから考察出来るように、保育者が幼児の楽器体験をより良いものにしたいという思いで活動していることが分かる。「合奏劇」の鑑賞においても、保育者側の理解と協力があってこそ実践が可能であった。この保育者の思いは、領域「表現」のねらいに繋がり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に繋がっていると考える。

5.1 領域「表現」における幼児の楽器遊び

幼稚園教育要領領域「表現」のねらいでは、その内容として全（8）項目が示されている。その中で、「合奏劇」の音楽体験に特に関わる項目として、（1）の「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」、（4）感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由に書いたり、つくったりする、（6）音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなどする楽しさを味わう、（8）自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう、の4項目を抽出する。「合奏劇」が、鑑賞だけでなく、そのストーリー性を通して、楽器の音色や形状や素材への関心、楽器を演奏しながら歌うことの楽しさ、各楽器のキャラクターを活かした演じ方の面白さなど、幼児の表現力や感性を育む音楽体験の教材として有効であると考えられる。

5.2 小学校低学年「器楽」における打楽器

小学校学習指導要領「音楽」¹¹の小学校低学年のA表現（2）の器楽の活動では、アイウの指導事項として、ア「曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いを持つ」、イ「（ア）範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能（イ）楽器の音色と演奏の仕方の関わり」に気づく、ウ「（ア）範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能、（イ）音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能、（ウ）互いの楽器や音の伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」を挙げている。

入学後の1年生では、「知識」、「技能」、「思考力・判断力・表現力等」と、「合奏劇」で定義づけた「聴く・見る・触れる・感じる・考える音楽体験」がどのように関わっていくのか（網掛け部分）、主たる教材となる「小学生の音楽1」に掲載された打楽器に関する活動を取り上げて考察する¹²。

5.2-1 打楽器の位置づけ「小学校の音楽1」における「器楽」

「小学生の音楽1」教科書の掲載順に、題材名、学習の目標、教材名、学習する打楽器、学習に関する記載内容について示す。また、学習指導要領「音楽」A表現の【歌唱】【器楽】【音楽づくり】、B鑑賞の分別、深い学びの3つの柱のうち、「知識」「技能」「思考力・判断力・表現力」についても記す。

題材名：拍を感じてリズムを打とう【歌唱】【器楽】/「技能」「知識」

学習目標：拍を感じながら歌ったり、リズムを打ったりすることができるかな

教材《じゃんけんぽん》《みんなであそぼう》《しろくまのジェンカ》

学習する打楽器等：カスタネットまたは手拍子

学習に関する記載：軽く弾むような感じで打ちましょう。持ち方、打ち方（具体的な絵図掲載）。四分音符と四分休符リズム3種類を教材曲中の歌に合わせて、指打ちで打つ。

教材《ぶんぶんぶん》

学習する打楽器等：タンブリンまたは手拍子

学習に関する記載：指を穴に入れずに楽器を持ちましょう。持ち方と、打ち方（具体的な絵図掲載）。四分音符と八分音符によるリズムを教材曲中の歌に合わせて、指打ちで打つ。

題材名：色々な音を楽しもう【鑑賞】/「技能」「知識」「思考力・判断力・表現力」

学習目標1：耳を澄まして、色々な音を聴きましょう

教材《シンコペーテッド・クロック》

学習に関する記載：ウッドブロックとトライアングルの音に気を付けて聴きましょう

学習目標2：星空の様子に合う音で演奏しましょう【音楽づくり】/「技能」「知識」「思考力・判断力・表現力」

教材《きらきらぼし》

学習する打楽器：鉄琴

学習に関する記載：打ち方（具体的な絵図）。星空をイメージして、鉄琴を鳴らす

学習目標3：色々な音を見つけて鳴らしましょう

学習する打楽器：トライアングル

学習に関する記載：1つの楽器から、何種類の音を見つけられるかな。持ち方、鳴らし方（具体的な絵図）。響かせて打つ（ちーんちーん）、細かく打つ（ちりりりりん）、握って打つ（ちっちちっ）。

学習内容：音探し

学習する打楽器：鈴

学習に関する記載：それぞれの楽器の持ち方を覚えて、色々な楽器の鳴らし方を試しましょう。楽器を鳴らしながら、音をよく聴きましょう。

学習に関する記載：打ち方、持ち方（具体的な絵図）。鳴らし方：手首を打つ（しゃ

んしゃんしゃん)、細かく振る(しゃららららん)。

学習内容：星空の音楽の創作

星空の様子を表す音楽を作りましょう。

使用する打楽器：鉄琴、鈴、トライアングル

学習に関する記載：どんな楽器で、どんな強さで鳴らそうかな。それぞれの絵に合った様子を表す音を見つけて、星空の音楽を作りましょう。

星が見えなくなっていく様子を表すにはどうしたらいいかな。

題材名：音を合わせて楽しもう【器楽】/「技能」「知識」「思考力・判断力・表現力」

学習目標1：歌声と楽器の音を合わせて演奏しましょう。

教材《トンくるりん ばんくるりん》

学習に関する記載：歌に合わせて鍵盤ハーモニカ（またはハーモニカ）、タンブリン、トライアングルを演奏しましょう。（小三部形式による）（あ）と（い）の違いを身体で表現して感じ取ってね

学習目標2：互いの楽器の音を聴きながら演奏しましょう

教材《子犬のマーチ》

学習に関する記載：リズム伴奏をカスタネット、タンブリン、鈴で打ちましょう。友達の楽器の音をよく聴いて、気持ちを合わせて合奏しましょう。

学習目標3：音楽を楽しみながら聴きましょう【鑑賞】

教材《ラデツキ―行進曲》

学習に関する記述：音楽に合わせて、手拍子を打ったり足踏みをしたりしながら聴きましょう。音楽の強さに合わせて、手拍子を打つ強さを変えながら聴きましょう。

5.2-2 「小学生の音楽1」の打楽器に関する活動の考察

「小学校の音楽1」で学習する打楽器は、教科書の掲載順においてはカスタネット、タンブリン、ウッドブロック、トライアングル、鉄琴、鈴である。また、楽器を使った活動としては、【歌唱】と【器楽】では、4曲の教材の歌に合わせて歌詞のリズムを弾むように打つ指打ち、【鑑賞】では、耳を澄まして楽器の音色を聴く、音楽を身体で感じて手拍子を打つ、【音楽づくり】では、1つの楽器から鳴らし方の工夫によって何種類の音を見つけ出せるか、どんな強さで鳴らしたらよいか音色を変化させる奏法の工夫、【器楽：合奏】では、お互いの音をよく聴きながら、歌に合わせて演奏する内容である。小学校音楽科においては、他者との協働を通して、音楽表現を生み出していくこと、音楽を聴いてその良さを見出していくことで「音楽的な見方・考え方を働かせる」ための活動の過程を重要視していくことが示されていることから、第1学年での打楽器に関する学習では、友達との活動を通して、聴くこと、見ること、感じること、考えることを学びの核としていると考える。

5.2-3 「合奏劇」の教材性その2の考察：楽器体験から小学校における打楽器の学習への繋がり

前述のように「合奏劇」では、「聴く・見る・触れる・感じる・考える音楽体験」を定義3として位置付けた。幼児における楽器体験は、楽器の素材や形状に実際に触れ、音や音色との初めての出会いを大切にするところから始まり、どうしてこんな音がするのか、どうやって鳴らしたらそんな音が出るのかという興味や関心から芽生える学びの出発点になる。楽器の音色をよく聴くこと、形状を観察すること、木製、金属製、皮製など様々な素材を持った楽器にじっくりと触れてみること、歌や音楽に合わせて思い思いに音や楽器を鳴らしてみること、音を工夫して考えて鳴らしてみること、楽器体験を通して自分が感じたことを伝え合うことは、幼児期だからこそゆっくりと時間を掛けて体験出来ることであり、それは深い学びに繋がる貴重な時間である。幼児がこのような体験を経て入学してくることを踏まえ、幼児期の学びを取り入れ、幼児期の経験を小学校の学習に繋いでいくことこそ、小学校入学時のスタートカリキュラムが担う役割の1つであると考えられる。また、幼児期に存分に音遊びや楽器遊びを行うことが、小学校入学後の器楽や鑑賞、音楽づくりでの学びを支え、豊かな学びを引き出す土壌となると考える。楽器遊びの体験が学びの継続となって小学校の器楽活動に受け継がれていくことが大切であり、幼児期と児童期を担うそれぞれの教員が体験の先にある学びの継続を意識し、共有することが、音楽経験における真の幼小連携であると考えられる。

(望月たけ美)

6. まとめ：「合奏劇」の今後の展望

これまで「合奏劇」は、保育者養成校での授業、保育現場で実践する学生、幼児の劇鑑賞、幼稚園教諭新採用研修プログラムとして実践の場を得てきたが、鑑賞教材としての視点で捉えた時の有効性が明らかとなった。また、幼児の楽器遊びから小学校低学年「器楽」の学びに繋がる教材としての有効性も推察された。保育者アンケートの結果からも分かるように音や楽器との触れ合いは0歳児から始まり、幼児期の終わりまでを過ごす環境の中で、豊かな感性と表現力を育む教材との出会いは大きい。そこで、「合奏劇」の3つの定義である、「登場人物が楽器である」「楽器との初めての出会いにおける環境作り」「聴く・見る・触れる・感じる・考える音楽体験」をもとに、教材性を活かした展開を計画していきたい。例えば、スタートカリキュラムでの実演、登場人物である楽器を和楽器や民族楽器にして第二、第三の台本を作成していくこと、実践する対象を幼児から小学生に広げていくこと等、「合奏劇」が有する可能性について模索していきたい。

(望月たけ美)

注：

1. 碓井幸子 清泉女学院短期大学研究紀要 第35号 平成29年「幼児教育を学ぶ学生の実践力を養う教材研究の方法と課題」
2. 白石景一 長崎女子短期大学紀要 第42号 平成29年「保育者養成校におけ

る音楽指導法の研究—第10報—～保育内容領域「表現」の専門的事項に関する科目「子どもと表現」の指導に向けて～

3. 『幼児の音楽と表現』（下田和男・西村政一編著）建帛社 の第6章 pp125-129 のつくる活動に掲載されていた「がんばれカ斯塔くん」のお話をもとに、筆者（望月）が「がんばれカスタネットくん！」としてアレンジした内容を台本に作成した。

4. 《タンプリンのわ》（山下武夫 作詞、岩河三郎 作曲、早川史郎 編曲）

5. 《トライアングルのうた》（渡辺 茂 作詞・作曲、堀場宗泰 編曲）

6. 《すずらんの鈴》（則武昭彦 作詞、杉山雅美 編曲）

7. 《パクパクカスタネット》（杉山雅美 作詞・作曲）

8. 《雨だればったん》（村山寿子 作詞、一宮道子 作曲）

9. 望月たけ美・山本華子 日本学校音楽教育実践学会 第24回全国大会自由研究部門「学生・子ども・保育者それぞれに働きかける「合奏劇」の教材としての有効性」令和元年8月17日 畿央大会場にて口頭発表

10. 神奈川県私立幼稚園教諭新採用教員研修会 令和元年8月7日実施において、筆者（望月）が、研修講師として「合奏劇」（研修会バージョン）を研修プログラムとして用いた。実践会場は鶴見大学音楽室

11. 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編 平成29年7月 文部科学省

12. 「小学生のおんがく1」教育芸術社 平成31年2月10日発行

引用・参考文献

1. 小学校学習指導要領 平成29年3月告示 文部科学省

2. 幼稚園教育要領 平成29年3月告示 文部科学省

3. 碓井幸子 清泉女学院短期大学研究紀要 第35号 平成29年「幼児教育を学ぶ学生の実践力を養う教材研究の方法と課題」

4. 白石景一 長崎女子短期大学紀要 第42号 平成29年「保育者養成校における音楽指導法の研究—第10報—～保育内容領域「表現」の専門的事項に関する科目「子どもと表現」の指導に向けて～

5. 『幼児の音楽と表現』下田和男・西村政一編著 建帛社 の第6章 pp125-129 のつくる活動「がんばれカ斯塔くん」

6. 子どものための音楽表現技術 感性と実践力豊かな保育者へ 今泉明美、有村さやか編著 望月たけ美、宮川萬寿美、東元りか、高地誠子著 萌文書林 平成29年

7. ここが変わった！3法令改訂の要点とこれからの保育 無藤隆著 チャイルド社

8. 「合奏劇」の実践～授業から保育現場へ～ 望月たけ美、山本華子 小田原短期大学研究紀要第50号 令和2年3月

9. 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編 平成29年7月 文部科学

省

10. 「小学生のおんがく1」教育芸術社 平成31年2月10日発行
11. 教員免許状更新講習 保育現場での質を高める 文部科学省認定番号 平31-80011-508928号 野津直樹(単著)、望月たけ美(単著) 令和元年10月 公益社団法人 神奈川県私立幼稚園連合会